

二〇二三年 今年は「ネ」年

浜田 道雄

穏やかな朝が来て、新しい年になった。今年は十二支では「卯年」。日本では「子、丑、寅、卯」に十二の動物を当て、「ネズミ、ウシ、トラ、ウサギ」と読む。だから今年は「ウサギ年」だ。「ウサギらしく穏やかな年」になるか、あるいは「ピョンと飛び跳ねる躍動の年」になるかと人々は願う。

十二支に動物を当てる風習は「十二生肖」といい、古代中国にはじまるが、これは東アジアだけではなくチベット、インドからイスラム圏、東欧にまで広がっている。だが十二の動物はどれも同じというわけではない。

ヴェトナムでは「卯」は「ネコ」だから、今年は「ネ」年。またタイやチベットにも「ネ」年」とする人々がいる。それでタイでは、今年はこの賀状のようにネコとウサギが肩を組んで新年を祝う。



違いは「卯」だけではない。「酉」はインドでは「ガルダ」だし、「辰」はアラビアでは「ワニ」、イランでは「クジラ」。「未」は多くの民族では「ヤギ」で「ヒツジ」は少数派。「丑」は東南アジアではもちろん「水牛」で、「亥」は中国など多くのところは「ブタ」で「イノシシ」ではない。また「戌」は「犬」ではなく「狗」を当てる。十二の動物はそれぞれの民族独自の生活風習のなかで選ばれ、受け継がれてきたもの。そこには彼らの歴史、文化の伝統が反映している。

いま世界はグローバル化の波のもとに西欧文明が各地を席卷している。人々はその便利で快適な生活様式に魅せられて自分たちの生活に取り込み、その一方で固有の文化風習を失っていく。彼らの十二生肖もこの流れのなかで、やがては消えてしまうかもしれない。

社会が豊かになり、人々がより幸せに生きられる世界はたしかに望ましい。だが消えていく文化風習にも良さはある。西欧的利便を「好し」とする現代にあっても、異なる文化風習がタイの年賀カードのように「肩を組んで」共生していける、そんな余裕のある社会があってもいいのではなからうか。

(文字数 八〇〇字)

(何でも書いて 二〇二三年一月一日)